

「失礼します」

職員室のドアを開けながら、中に居るであろう先生に声を掛ける。

「お、来たね。こっちこっち」

こちらに気付いた先生が手招きしてくる。転校手続きの時にも会った男性教師だ。

「えっと、こんにちは」

「ああ、こんにちは。まあ、とりあえず座って」

「はい」

先生とは対面の席に座る。初めて話すわけでもないのに、なぜか緊張する。

「まずは歓迎しておこう。ようこそ、我が校へ」

「ありがとうございます」

簡単な挨拶を終えると、先生は急にすまなさそうな顔をした。

「今日は校舎の案内をしようと思ったんだが、あいにく僕は外せない用事があったね。残念ながら君について行けないんだ」

「はあ」

そこまでしてもらえとは思っていなかったので、思わず生返事を返す。
というか、休日なのにお疲れ様だ。

「でも大丈夫、代わりの人を呼んでおいたから」

先生には不安に映ったのだろうか、若干焦ったように続けてくる。

「そろそろ来る頃だと思うんだが……………お、噂をすれば」

「失礼します」

扉を開く音とともに、背後から女性の声が聞こえた。
振り返って見ると、この学校の制服を着た女生徒が居た。ただ立っているだけなのに、何か威厳のようなものを感じる。

「ちょうどいいところに来てくれたね」

先生の反応を見るに、彼女が案内役らしい。

「紹介するよ、彼女が案内役の早見君だ。この学校の生徒会長も務めている」

なるほど、この雰囲気はそのせいかな。
椅子から立って姿勢を正し、彼女の方に向き直る。

「転入生の渡来です。よろしくお願いします」

しっかりと会釈。挨拶は大事だ。

「3年生、生徒会長の早見です。今日は学校の案内をさせてもらおうわ。渡来君は2年……で合ってるわよね？」

「あ、はい。今日は案内お願いします」

「丁寧でよろしい。じゃあ先生、行ってきますね」

「うん、頼んだよ」

「はい。渡来君、付いて来て」

「分かりました。先生、失礼します」

「はい、行ってらっしゃい」

先生に見送られながら、職員室を後にする。

「さて。まずは普段使うところからかしらね。食堂に案内するわ」

言いながら、会長は歩き出す。

「お願いします」

その背中に答えながら、俺は会長の後を付いていった。

「あらかた回ったかしらね。ここまでは大丈夫？」

普段の学校生活で必要になるだろう場所の案内を終えたところで、会長が聞いてくる。

「はい。まだうろ覚えのところもありますけど、そこは追々慣れていきます」

「よろしい。じゃあ、最後に一応生徒会室も案内しておくわね」

「お願いします」

答えを聞くが早いか、会長は歩き出していく。

しばらく付いて歩くと、“生徒会室”の札が掛けられた扉が見えてきた。

「さ、入って」

「失礼します」

会長に促されて中に入る。室内には長机、ホワイトボード、ファイルの詰まった棚など、いかにも生徒会室、といったものが配置されていた。

「ようこそ、生徒会へ」

扉を閉めながら会長が声を掛けてくる。

「俺、役員じゃないですよ？」

「言ってみただけよ、気にしないで」

言って会長は机に備え付けられた椅子に座る。
そして、座れというように目配せしてきた。応じて、対面に座る。

「それで？ ここには慣れそう？」

「それはまだ何とも……。同級生の人柄とかにもよるでしょうし」

「そう。まあ、そこは仕方ないわね。……ところで、ちょっと提案があるんだけど」

「何ですか？」

「さっきは言ってみただけって言ったけど、本当に役員になってみる気はない？」

「俺が、ですか？」

うむ、とうなずく会長。
しかし、生徒会役員と言ってもそんなに簡単になれるものなんだろうか。普通、立候補やら投票やらあるもんじゃないか？
そんな疑問を見抜いたように、会長は続ける。

「うちの生徒会はちょっと特殊でね、普通の役員とは別に風紀委員ってのがあるのよ」

「はあ」

風紀委員って、普通はクラス委員の括りじゃないか？
気の抜けた返事を返す俺を気にした風もなく、会長はさらに続ける。

「で、この風紀委員なんだけど、生徒会役員の推薦があればなれるわけよ。仕事は簡単に言えば生徒会の手伝いで、現時点では担当がないの」

「……で、それと慣れるのと何の関係が？」

「そう急かさないで？ 単純な話よ。仕事で色々なところに顔を出すから、嫌でも慣れるってこと」

「はあ、なるほど」

そういうことなら納得できる。場所としても対人としての意味でも学校に慣れるという訳だ。

「でも、転校したての俺なんかがやっても良いものなんですか？」

「言ったでしょ、手伝いだって。そこまで重要な仕事を任せるわけじゃないから、基本的には誰でも問題ないのよ」

「誰でも良いならなんでまた……」

「本来は必須じゃない役職だからねこれ。必要なら用意出来るってだけだし。まあ、私からの激励みたいなものかな。本当にちょっとした手伝いだけだし、やってみない？」

「まあ……そういうことなら」

やっても良いかもしれない。俺としても学校には早く慣れたいし、ちょっと手伝うくらいなら問題はなさそうだ。この人も頼りになりそうだし。

「そう、じゃあこれからよろしくね、渡来君」

「こちらこそ、よろしくお願いします会長」

どちらからともなく握手を交わす。

「それじゃ、案内はこのくらいで良いかしらね。早速明日からお願いするわよ」

「いきなりですか！」

「そ。早い方が良くない？ とりあえず授業が終わったらここに来て」

「……分かりました。じゃあ、俺はこれで帰ります。明日からの準備をしておきたいんで」

軽く苦笑しながら答える。

「そうね、しっかり準備しときなさい。それじゃ、また明日」

微笑みながら会長が言う。

「はい、また明日」

それに軽くお辞儀を返し、俺は生徒会室を後にした。

「さあ、入ってきなさい」

「はい」

先生に呼ばれ、目の前の扉を開く。

途端、大量の視線が突き刺さる。ざっと見た感じ、30人くらいは居るだろうか。

怯みつつ、教壇に向かって歩く。

「……………」

いざ教壇に立ち、正面から見渡すと圧倒される。

「渡来君、自己紹介を」

「は、はい」

つい上ずった声を出してしまう。誰かに軽く笑われた気がするが、気にしない。

「渡来飛路です。よろしくお願ひします。細かい紹介は追々……………」

ついつい尻すぼみになってしまう。

しかし、帰ってきたのは先ほどより幾分やわらかい好奇の視線だった。

根暗の烙印を押されることだけは回避できたらしい。

「渡来君の席はあそこだ。座り次第、ホームルームを始めよう」

言われ、指定された席に着く。相変わらず視線は絶えないため落ち着かない。

一抹の不安を抱きつつ、俺は先生からの連絡に意識を持って行った。

「ふう……」

迎えた昼休み。思わずため息を吐く。

授業の方は問題ない。進度も前の学校とさして変わらないし、先生の教え方もそこそこだ
と思う。

問題は、合間合間の休み時間に質問攻めにされることだ。転校生の宿命とはいえ、少々き
つい。

そして今はさらに時間のある昼休み。向こうも聞き足りないだろうし、これまで以上に押
しかけてくるだろう。

「渡来、今良いか？」

声を掛けてくる男子が一人。さっそく呼び捨てにされているのは親しみやすくていいとは思
うものの、今回は間違いなくこいつが口火を切っている。

案の定、遅れて数人周りにやってきた。

「じゃあ、聞きたいんだけど——」

そこからは質問の連続。出身やら趣味やら休日の過ごし方やら、いかにもなテンプレばかり
である。こっちとしても早くクラスに馴染みたいので、無下にもできない。ちょっとした
個人情報のバーゲンセール状態だ。

「そういや、渡来は昼飯どうするんだ？」

質問が一区切りしたところで、一人の男子——名前は確か中澤だったか——が聞いてくる。

「とりあえず、今日は食堂で食うつもり」

「学食か。場所わかるか？」

「大丈夫、昨日案内してもらったし」

「なんだ、そうなのか。じゃ、早速行こうぜ。早くしないと席埋まっちゃう」

「ああ」

答えて席を立ち、食堂へ移動する。

大した距離もないので、すぐに着いた。幸い、二人分の席くらいは空いているようだ。

「そういえば、誰に案内してもらったんだ？」

注文した物を受け取り、席に腰を落ち着けたところで中澤が聞いてくる。

「生徒会長。そういえば、風紀委員に誘われたな」

うどんをすすりながら答える。

「風紀委員？ クラス委員のか？」

「いや、生徒会扱いらしい。仕事は基本的に手伝いなんだと」

「へえ、そんなのがあるのか」

驚いた、という顔だ。

「知らなかったのか？」

「おう。つか今の会長は優秀だって聞くし、手伝いとか要るのか？」

「俺への激励らしい。色んなところに顔を出すから、学校に早く慣れられるだろうってさ」

「なるほど。聞いた感じだと風紀委員っていうよりは庶務っぽいな」

「確かにな」

言われてみるとそうだ。

「仕事は早速今日の放課後からなんだと」

「頑張れよー。俺は陰ながら応援させてもらうわ」

「おいおい、そこは素直に助けてくれよ」

おどける中澤に、苦笑しながら答える。
こうして、転校初日の昼休みは過ぎて行った。

「失礼します」

時間は過ぎて放課後。ノックをして生徒会室に入る。

「いらっしやい、早かったじゃない」

既に中には会長が居た。何やら書類に向かってペンを走らせている。

「初日から遅刻は避けたいんで。……で、仕事って何をすればいいんですか？」

「良い心がけね。さしあたり、今日は書類仕事をしてもらうわ」

「分かりました。どれですか？」

「ちょっと待ってね……はい、これ」

ドン、という音とともに、机に書類の束……というより山が置かれる。

「えっと……何ですか、これ？」

「何って、君の仕事だよ？」

「いえ、そうじゃなくて、『ちょっとした手伝い』って言ってませんでした？」

「そう。だからちょっとだけど？」

「どう見ても“ちょっと”じゃないでしょう、これは！」

「そこは見解の相違ね」

白々しい笑顔を浮かべて言う会長。

「まさか……騙しました？ 実際は体の良い雑用が欲しかっただけじゃないんですか？」

「どう思ふかは君の勝手。ちなみに止めようと思っても無理だからね、昨日のうちに申請は済んでるし」

「なッ……！」

なんて手回しの早い……。

「というか、誘いを受けたのは君でしょ？」

「ぐ……」

それを言われると弱い。確かにやると言ったのは自分なのだ。

「……わかりました。やればいいんでしょう、やれば」

「よろしい。じゃあ改めて、ようこそ生徒会へ」

満面の笑みを浮かべる会長。俺は肩を落としながら席に座り、書類の山に向かう。

「大丈夫よ、重要な案件は外してあるから。内容をよく読めば誰でも出来るわ」

「……不安なのはそこじゃないです」

の外れな心配をする会長をよそに、内容を読むことに集中する。

「ちなみにこれ、下校時間までに終わらなかったらどうなるんですか？」

ふと気になったので聞いてみた。

「ん？ 当然持ち帰りよ？」

「ですよね……」

うん、半分予想はしてた。

「ほら、さっさとする。時間は有限よ？」

「……はい」

仕方ない。やるからには全力でかからないと。
完全に諦め、俺はペンを走らせる作業に没頭した。

翌日、放課後。

「失礼します……」

あくびをかみ殺しつつ、生徒会室の扉を開く。

「いらっしやい。眠そうね、渡来君」

「その原因が何言ってんですか……」

お陰で転校2日目で居眠りしてしまった。しかも頭がクラクラする。

「それで、昨日の書類は？」

「あー、書類ですか……」

鞆に入れた書類を取り出す。

「まあ、昨日の調子を見るに終わってなさそう……」

「確認お願いします」

聞き流しながら、なかば投げ出すように書類を渡す。

「……え、終わったの？」

驚く会長。

「そうですけど。……何か問題でも？」

「いえ、そういう訳じゃ……。とにかく、確認させてもらわね」

言って書類をめくっていく会長。そのスピードはかなり速い。彼女からすれば、この程度は楽な部類なんだろうか。

一通り確認し終えたあたりで、会長は何やら考え込んでいる。

「……大丈夫でした？」

「問題ないわ、ご苦労様。じゃあ、次の仕事なんだけど」

早速か。いくらなんでも酷くないか、これは。

「各部活動の予算報告書を集めてきてもらわ。生徒会の者だって言って、要件を伝えれ

ば向こうが把握してるはずだから。よろしくね」

「……分かりました。期限は？」

「今週中かしらね。とりあえず今日は部室棟に行ってきて。場所は前案内したからわかってるわよね？」

「はい」

これを見越して案内したんじゃないかなろうかとも思ったが、口には出さないでおく。他に軽く説明を受けた後、ファイルと筆記用具をもって俺は席を立つ。

「じゃ、行ってきて。はいこれ、部活のリスト」

手渡されたリストに目を通す。……うん、多い。

「……行ってきます」

早くも気疲れしながら、生徒会室を後にした。

時間は過ぎて週末。仕事の締め切りである。
会長は外回りで居ないが、そのうち戻ってくるだろう。
俺はというと、軽く震えながら集めた予算報告書を確認している。

「ただいまー」

明るい声とともに、会長が戻ってきた。

「……お帰りなさい」

「はいただいま。……どうしたの、震えてるけど」

「……いえ、ついさっきまで身の危険を感じていたもので」

「……は？」

「……いえ、何でもありません」

仕事で部室に入ったら上半身裸の男——柔道部部長、ガチムチ——が座っていて、「遅かったじゃないか……」と呟いたとか、思い出したくもない。

「まあいいけど。それで？ 報告書は集まった？」

「……ああ、そっちは大丈夫です」

先ほど一通り集め終えたところだ。確認もほぼ済んでいる。

「だいたい見直しましたが、一応確認をお願いします」

軽く整えて会長に手渡す。

受け取るとほぼ同時に目を通していく会長。相変わらず早い。

「うん、問題ないわね。ご苦労様」

「ふう……」

思わず胸をなで下ろす。これでもう一度やり直し、なんてことになったらシャレにならない。ただでさえ多い部活めぐりをもう一度する羽目になるのは御免だ。特に柔道部。

「なんかんだ言ってやりきるわね、渡来君。任せておいて難だけど、今回は結構面倒だったのに」

「そう思うなら邪魔はしないで下さいよ……」

こちらが生徒会室に居る隙を見つけては、書類を渡してくるのは勘弁してほしい。

「邪魔？ 何のことかしら」

白々しい。書類を渡す時の目が明らかに笑っていたじゃないか。言っても無駄だろうから言わないけど。

とにかく、俺の仕事は一旦終わりのはずだ。

「じゃ、今日はもう良いですよね」

「そうね……。今日は特に重要な案件は抱えてないし、せいぜい補佐くらいかしら」

「じゃあ寝てて良いですか？ 最近ほとんど眠れてないんで。呼ばれたら起きますから」

「それは無理ね。書類ならあるから」

なん……だと……？

「今、補佐くらいって……」

「だから補佐よ？ 簡単な書類仕事」

バサッと束を出してくる会長。軽くめまいがしてきた。

「さ、寝てる暇はないわよ。基本的に書類はいくらでもあるんだから」

「マジですか……」

聞きたくなかった、そんな事実。

「じゃ、お願いね」

「……分かりました」

重い頭を何とか叩き起こしつつ、軽くゲシュタルト崩壊しつつある紙束に向かう。
……今日も睡眠時間は短そうだ。

2週間が過ぎた。

相変わらず会長は大量の仕事を俺に回してくる。睡眠時間も変わらず少ないままだが、なんとかこの生活にも慣れてきた。

「お疲れだな、渡来」

「ん……ああ、中澤か」

いかん、意識が飛んでた。

「すげえ眠そうだが大丈夫か？ ヤバいなら保健室行ったらどうだ？」

心配そうな表情で言う中澤。

「ありがと、でも大丈夫だから」

「なら、良いけどよ……。無理はしすぎるなよ、マジで」

「……ありがとな」

もう一度大丈夫だと言うように、笑って見せる。

中澤も分かってくれたのか、表情が明るくなった。

「じゃあ、湿っぽい話は止めだ。ここからは明るく行こうぜ」

「おう」

こういう反応は素直に嬉しい。少し気分が軽くなった気がする。

「まだ先だけど、学園祭が近づいて来てるな」

「そうなのか？」

「知らなかったのか？ 再来月だぞ。つっても後一か月半くらいだが」

「仕事に追われてたからなあ……。でも、学祭か。楽しめるといいな」

祭りは好きだ。準備もそうだし、何より本番で弾けられるのがいい。

「そろそろ有志とかの申請は始まるんじゃないかな」

「あーやっぱ有志とかあるのか……。うん？」

……。申請？

「今年はどうな奴らが出るんだろうな……。どうした、渡来。いきなり黙りこくって」

「……。嫌な予感がして」

まさかとは思うが、流石になあ。

……。大丈夫、だと思いたい。

「さて、じゃあ学園祭について話しましょうか」

「やっぱりですか……」

生徒会室での会長の第一声。

「やっぱりってどういうことよ？」

「何でもないんで、気にしないで下さい」

大方、また書類の山を押し付けられるんだろうなあ。睡眠時間は減る一方か。
そんな俺を気にした風もなく、会長は続ける。

「本番は再来月だけど、仕事はもうあるわ」

「有志の申請とかですか？」

「そう。他にも、外部との交渉とか色々と」

なるほど、そういうのもあるのか。また面倒そうだな。

「で、今回渡来君にやってもらいたいのは学内の方なんだけど」

「具体的には、何をすれば？」

さっきも言った申請とかだろうか。それならまだ楽だから良いけど。それだけじゃ済まないだろうな、会長だし。

「全部」

「……え？」

今、おかしい単語が聞こえたような。

「だから、全部よ。学外は流石に私がやるけど、内部の方はお願いするわ」

……聞き間違いじゃなかった。

「それは、つまり……」

恐る恐る、続きを促す。

「学園祭実行委員長ね、実質」

……マジですか。

予想以上で声も出ない。

「黙ってる場合じゃないわよ、渡来君。仕事は沢山あるんだから、迅速に行動しないと」

「……了解です」

予想以上過ぎて抗議する気も起きない。仮に抗議しても無駄だろうが。

「さっきも言ったけど、まずは有志の募集からかしらね。クラスごとの出し物はまだ先だし、こっちとのすり合わせもまだ無いし」

つらつらと話す会長。こっちもいい加減切り替えないと。

「今ぐらいだとそこまで仕事無いんじゃない？」

「そうなるわね。今の時期だとそれぐらいしか無いから、今日は通常業務でやってもらうわ。もちろん、本格化してきたらそっちもだけど」

掛け持ちか、辛いな。

「……分かりました、やってみます」

「お願いね。じゃあ、今日の分」

そしていつものごとく書類を取り出す会長。それをいつものように受け取り、仕事を始める。

……正直、俺に実行委員長が務まるかは不安だが。それでも、やるからにはしっかりしないと。

やることが多いと時間は一瞬で過ぎるもんだ。最近はその骨身に染みてよく分かる。気付いたら学祭まで2週間を切っていた。俺はというと……

「備品レンタルのプリント持ってきましたー」

「了解、確認させてもらうよ」

「有志のプログラム、どうなってる？」

「一通り出来てます。確認しておいてください」

「渡来一、当日のシフトなんだけど」

「すまん、一息ついたら教室でやるから、それまで待つて！」

とまあ、上から下まで様々なクラスの生徒を相手にしている。
この時期になると仕事と言ってもほぼ学祭関連のみだ。なので、俺は生徒会室で書類をさばきつつ対応している。
一応、正式な実行委員長ではないので一人ではないのが救いだ。隣には俺とは別に実行委員長役が座って対応している。

「備品の申請書がまだ揃ってないな」

と隣からの声。

「マジか。仕方ない、ひとつ走り行ってくる。悪いけど対応頼む」

隣に言い残して、俺は生徒会室を出る。
走りながら回収先の位置を思い出し、頭の中でルートを組み立てる。もうすっかり学校の地理は頭に入ってしまった。

「すみません、備品の申請書がまだなんで回収しに来ました」

最初の教室に入って声を掛ける。

「え、さっき実行委員が行ったところなんだけど」

くそ、入れ違いか。

「分かりました、ありがとうございます」

軽く会釈して立ち去る。

「えっと、次は……」

次の教室に向かいながら、携帯で生徒会室の実行委員長に連絡を取る。

「3-Cの申請書なんだけど……。うん、今そっちに行ってるらしいから、対応お願い。……うん、それじゃ」

通話を終了し、待ち受け画面の時間を見る。

「ちょっと時間掛かってるな……。急がないと」

軽く走りながら次の教室へ。着いて書類を受け取ったら、また別の教室へ。生徒会室に戻ったら戻ったで、各クラスへの対応と暇がない。準備期間は、慌ただしく過ぎて行った。

学園祭当日。

天候にも恵まれ、各々の準備も万全だ。最高の学園祭日和と言える。

「3番テーブル、ケーキセット2つ！」

「誰か5番のオーダーお願い！」

俺のクラスの出し物、喫茶店も、今のところ問題なく営業している。

「渡来、客が多すぎてオーダーが間に合っていない！」

「今がピークだから、過ぎれば何とかなる！ 悪いけど我慢してくれ！」

「了解！」

一応俺のクラスにも実行委員は居るのだが、なぜか俺が仕切っている。とはいえ、連携の手間が省けてある意味助かってはいるが。

「俺舞台のほう行かなきゃならないから、後よろしく頼む！」

その実行委員に声を掛け、俺は体育館に向けて走り出す。
そろそろ有志の舞台が始まる時間だからだ。プログラム通りに行くよう、管理する必要がある。

「すみません、遅くなりました！」

「来たか、渡来。まだ時間は大丈夫だ」

「ありがとうございます。有志のメンバーはもう集まっていますか？」

「それが、3番目のグループが来てないんだ」

「分かりました、こっちで連絡取ります。一応プログラム変更の用意はしておいてください」

「分かった、頼む！」

携帯を開き、事前に聞いた連絡先にコール。

「もしもし、実行委員の渡来です。そろそろ開演なんですけど……え、遅れる？ ……はい、分かりました。じゃあ後に回すんで、それまでに来てください」

「どうだった？」

スタッフが聞いてくる。

「遅れるそうです。プログラム変更して、後に回します。で変更なんですけど……」

細かい修正案を説明していく。

それが終わったあたりで、携帯が鳴った。クラスの方からだ。

「と、すみません。……もしもし、どうした？ え、ボンベが足りない？ じゃあ、先に生徒会室行って追加の申請書書いといてくれ。俺もすぐそっち行くから」

指示を出し、電話を切る。

「すみません、クラスの方でトラブルがあったんで行ってきます。こっちお願いします！」

「了解だ、任せておけ！」

答えを聞くが早いのか、今度は生徒会室に向かって走り出す。

「悪い、待たせた！」

「やっと来たか！ 申請書は出来てる、確認頼む！」

中で待っていた同級生から申請書を受け取って確認する。……よし、問題ない。

「OK、確認できた。じゃあ、予備のを渡すから付いて来てくれ」

「分かった！」

今度は予備の備品を取りに倉庫へ。その間にも電話が鳴った。

「もしもし、何かあった？ ……了解、そっち行くから待ってて」

「何かトラブルでもあったのか？」

「らしい。悪いけど急がせてもらうな」

「分かった」

「ありがとう、助かる」

早歩きから小走りに歩調を強める。

「はいこれ。俺は行かなきゃならないから、そっちは頼む」

「了解、そっちも頑張るな！」

「おう！」

倉庫でボンベを手渡し、今度は先ほど連絡のあったクラスへ向かう。
その後も色々なところに顔を出し、あっという間に時間が過ぎて行った。

「……っ、はぁ」

思い切り伸びをして、息を吐き出す。
周囲はすっかり暗くなっている。学園祭はとっくに終わり、校庭では後夜祭が始まっていた。
生徒のほとんどが校庭に出ている中、俺は屋上で一人ベンチに座っていた。

「終わったなあ……」

正直走り回った記憶しかないけど、終わってみるとこれはこれで楽しかったかもしれない。
体は重くてもう動かないが、なぜか疲労が心地いい。これが達成感ってやつなんだろうか。

「……あー、疲れた」

さっきから眠気が凄い。今にも瞼が閉じそうだ。
というかもう寝てもいいよね。やることはやったし、後は流れ解散だし。

「……よし、寝よう」

呟いて本格的に寝に入る。
瞼を完全に閉じ、意識を手放す。次第に頭の中が真っ白になっていって……

「こんなところで何をしているのかしら？」

後方からの声に現実に戻された。

「……会長」

重い体を軽く引きずって後ろを向く。

「お疲れみたいね」

「会長は元気そうですが」

不満を込めて会長をにらみつける。

「あなたとは地力が違うからね。……といっても、普段よりは疲れてるわ」

こちらに近づきながら会長はさらりと答える。

「隣、良いかしら？」

「……どうぞ」

多分断っても座るだろうけど。

「で？ 君はあっちに行かなくて良いの？」

校庭を指しながら言う会長。

キャンプファイヤーの周りで、十数組のペアが踊っている。

「そんな余裕ありませんよ。歩くのも辛い」

「あら残念。ご褒美に相手してあげようかとも思ったんだけど」

悪戯っぽく笑う会長。

「動けても遠慮しときます」

「……そこまで言われると傷つくわね。良いの？ 自分で言うのもなんだけど上玉よ？」

上玉って……。確かに美人の部類には入るだろうけど。

「良いんです、これで。見て楽しむくらいが、俺の性には合ってるみたいなんで」

「……そう、ならいいわ」

納得した、という風な会長。

「そういえば、会長はなんでここに？」

「ん？ 私？」

気になったので聞いてみる。この人なら進んで混ざりに行きそうなものだが。

「君に話があってね。探してたらここに着いたってわけ」

「話、ですか？」

何かへまでもやらかしただろうか。覚えている限りでは大丈夫だったと思うんだけど。

「今日までの採点よ」

「採点？」

「そ。今日までの仕事に点をつけてあげましょうってわけ」

なんだ、別に大きいミスがあったとかじゃないんだ。

「で、何点なんです？」

軽く安心しながら聞く。

「んー、60点」

「うわ……」

思ったより低い。自分としては上手くやれたと思うんだけど。

「ぎりぎり及第点ってところね。周りに助けられたのも大きいけど、基本全部自分でこなしてみたいだし」

「辛口ですね……」

必死に頑張ったのに。あんまりじゃなからうか。

「そう気落ちしないの。私からすれば十分な結果なんだから」

「……そうですか？」

「そうよ。助けてくれる人が居るのは間違いなく良いことなんだから。誇っていいと思うわ」

……意外だ、会長が素直に褒めるなんて。

「じゃ、私はこれで」

あっけにとられていると、会長が席を立った。

「あ、はい。お疲れ様です」

「はい、お疲れ様。明日からもよろしく頼むわよ」

「……え？」

明日？

「何驚いてんのよ。学園祭が終わったんだから、事後処理があるのは当然でしょう？」

「うあ……」

どっと疲れが増す。

「今日はさっさと帰ってゆっくり休みなさい。明日も早いわよ？」

「休みとか無いんですか……」

ある筈はないと分かっているものの、聞かずにはいられない。
弱気な俺の言葉を聞きとがめたのか、会長がこちらを振り返る。

「休みなんかあるはずないでしょう。頼りにしてるんだから、来てもらわないと困るわ、
渡来」

「……え？」

「じゃあね、また明日」

それを最後に、会長は校舎に戻っていった。

「会長、今……」

……頼りにしてる、って言ったよな。しかも呼び捨て。
その事実を理解するのに数秒かかった。そして理解すると、嬉しいと思う自分が居る。

「我ながら、現金だなあ……」

あれくらいの言葉で揺れるのもどうかと思う。
でも、まあ……

「悪くない、か」

明日からのことを想像する。会長に振り回される自分が容易に想像できた。
そして同時に、それはそれで楽しそうだ、とも思う。

「……帰るか」

眩き、俺も席を立つ。
さっさと帰って休まないで、明日から保つはずもない。きっとまた、会長は書類の山と一
緒に俺を待っているだろうし。

「期待には、応えますよ」

それだけ胸に刻んで、家路につく。

帰るころには、頭は明日のことで一杯になっていた。